

## Dialectica et Neoaristotelismus ——Whiteheadの検討(1)——

赤井清晃

### 1. DetelのNeoaristotelismus

アリストテレス『分析論後書』のドイツ語訳と詳細な註解を著わしたW.Detelは、その著Aristoteles(2005年)の末尾に「新アリストテレス主義(Neoaristotelismus)」という章を設けて、次のように述べている。

Die neoaristotelische Bewegung zielt nicht darauf, die alten aristotelischen Positionen zu rehabilitieren, und sie beruft sich auch nicht auf genaue Textinterpretationen. Vielmehr handelt es sich hierbei um eine Wiederbelebung aristotelischer Intuitionen auf dem theoretischen Niveau der Gegenwartsphilosophie. (Detel, S.125)

新アリストテレス主義運動が目指すのは、古いアリストテレス的な立場を復権させることではないし、精確なテキスト解釈に拠り所を求めものでもない。むしろ、ここで問題なのは、現代哲学の理論的水準においてアリストテレス的直観を蘇生させることである。

ここで、ことわっておかなければならないのは、「アリストテレス的直観を蘇生させる」といっても、アリストテレスが直観したものは何であるかを確定するために、精確なテキスト解釈に拠り所を求めなければならないことは明らかであるが、Detelは、これを放棄しているわけではないことは、彼がアリストテレスについての文献学的研究を行なっていることからわかることである。他方また、「現代哲学の理論的水準において」アリストテレスが直観したものを蘇生させるということも、「現代哲学」の「現代」ということが、それぞれの時代の、すなわ

ち、同時代の、という意味であれば、21世紀だけでなく、アリストテレス没後のアリストテレス学派の時代から、中世の各時期にわたって行なわれてきたことであるから、それぞれの時代のアリストテレス主義があったわけであり、その都度のアリストテレス主義が、「新アリストテレス主義」であると言える。従って、「新アリストテレス主義」という表現で指し示される哲学史上の特定の学派が存在するというわけではなく、存在するとすれば、アリストテレス主義はすべて、その都度、新アリストテレス主義である、という言い方が可能であるだろう。

以上のことを念頭におくと、Detelのいう「新アリストテレス主義」は、「現代のアリストテレス主義」という意味でしかないように思われるけれども、問題は、その内実にある。Detelが、「現代哲学」ということで念頭においている中心的なものは、言語分析を中心とする分析哲学であるように思われる。

Man hat häufig darauf hingewiesen, dass Aristoteles zwischen theoretischer Wissenschaft und sprachlichem Alltagswissen nicht scharf unterschieden hat. Er beginnt seine Untersuchungen oft mit Überlegungen, die sich leicht als sprachliche Analysen lesen lassen, beispielsweise in der Physik. Diejenigen analytischen Philosophen, die sich überhaupt für die Geschichte der antiken Philosophie interessieren, neigen dazu, die wichtigste Art der aristotelischen Prinzipien, die >Definitionen<, als analytische Sätze zu verstehen. (Detel, S.139)

アリストテレスは、理論的(観想的)学知と

言語的・日常的知識とを明確に区別しなかった、ということがしばしば指摘される。アリストテレスは、その探究を、多くの場合、容易に言語的分析と解される熟考をもって始めている。例としてあげれば、『自然学』がそうである。一般に、古代哲学史に関心をもつ、分析的哲学者たちは、アリストテレス的な原理の最も重要なやり方である、「定義」を分析的命題と理解する傾向がある。

「しばしば指摘される」という第三者的言い方で言及されていることに Detel が同意しているとは信じ難いが、Detel が念頭においているのは、H. Putnam である。ここで関係項として取り上げられるのは、「理論的(観想的)学知」と「言語的・日常的知識」(日常言語によって表現された知識)であるが、前者が、エピステーメーであるとすれば、後者は、エンドクサ(通念)やパイノメナ(現象にして通念)であろうかと思われ、更に、後者は、「我々にとってよりよく知られるもの」であるとすれば、前者は「自然(実在、そのもの自体)にとってよりよく知られるもの」であるとも考えられる。Detel の記述は、「理論的(観想的)学知」であるエピステーメー、すなわち、「自然(実在、そのもの自体)にとってよりよく知られるもの」に対して、「言語的・日常的知識」であるエンドクサ(通念)やパイノメナ(現象にして通念)、すなわち、「我々にとってよりよく知られるもの」を対置させるということ、明示的ではないけれども、前提としていると思われる。そうであるから、問答法(ディアレクティケー)と学知(エピステーメー)とを関係項として対置させる次のような記述が可能なのであろう。

Eines der aufschlussreichsten Beispiele dafür, wie Aristoteles selbst den Zusammenhang zwischen Dialektik und Wissenschaft, zwischen Alltagswissen und Theorie sieht, findet sich in den *Analytica Posteriora*. (Detel, s.139)

アリストテレス自身が、問答法と学知の間関係は、言語的・日常的知識と理論(観想)知の関係をどのように見ているかを理解するために最もよい例のひとつは、『分析論後書』に見い出される。

実際、『分析論後書』B巻8章の「雷」の例を

挙げて、「雲におけるざわめき」という定義が言及されるが、これが学知(エピステーメー)に相当するとすれば、もう一方の「雷」という表現は「言語的・日常的知識」であり、これが問答法(ディアレクティケー)に相当することになる。しかし、このような割り振りの仕方に対しては、次のような疑問あるいは反論が可能であろう。すなわち、「言語的・日常的知識」である「雷」というパイノメナ(現象)から、学知(エピステーメー)である「雲におけるざわめき」へいたる分析・考察の過程は、問答法(ディアレクティケー)の営みであるのか、それとも、学知(エピステーメー)の営みであるのか、アリストテレスの立場は、むしろ、それを学知(エピステーメー)の営みであるとするのではないか、という疑問あるいは反論である。この問題に対する答は、答え手が、問答法(ディアレクティケー)と学知(エピステーメー)の関係をどのように捉えているかということに従って、流動的、相関的に異なってくるであろう。この点で、Detel の記述は明確ではない。しかし、もし、パイノメナ(現象)から、学知(エピステーメー)、すなわち、定義へいたる分析・考察の過程を、問答法(ディアレクティケー)の営みであるとすれば、逆に、学知(エピステーメー)の営みとは何か、という問いが生じ、定義されたものの結果の記述だけということではなく、学知(エピステーメー)の教授(例えば、J.Barnes)であるということになるとしても、アリストテレス解釈としては、俄に全面的な賛同は得られないであろう。

実際、この問題に関しては、問答法(ディアレクティケー)と学知(エピステーメー)の対象領域の区別を考慮することによって、両者の役割分担ともいべきものが可能であると考えられるが、今は、これの問題には立ち入らない。Detel において注目すべき論点は、むしろ、別の点にあると思われる。それは、何らかの対象の本質、すなわち、何であるか(定義)を規定する場合、アリストテレスの場合は、何であるかということに関して、理念としての本質が想定されていて、それはアリストテレスにとっては変更あるいは修正する余地のないもの

であったとしても、その本質の理念だけを結果として、我々は、それをそのまま受け入れるのではなく、そこへ至る方法あるいは論理的、分析的な操作を、誤謬の余地のあるものと認めた上で採用する、という点にあると思われる。そのことを、旧来の「本質主義」に対して、「新本質主義」と称して、次のように述べている（尤も、「新本質主義」の内実は、如何に「新～」という名称を冠していても、本来の「本質主義」の意味からすると一種の形容矛盾であるから、「相対的本質主義」あるいは「多元的本質主義」というほうがまだ許容されるのではないかとと思われる）。

So hat also der neue Essentialismus die aristotelischen Ideen von essenziellen Eigenschaften, die in der Wissenschaft gleichwohl auf fallible Weise untersucht werden, nach einer langen philosophischen Periode, die dem aristotelischen Bild kritisch gegenüberstand, auf einem reflektierten Niveau rehabilitiert. (Detel, S.139)

それ故、新本質主義は、学知においてであるにもかかわらず、可謬的な仕方では探究されてきた、本質的性質についてのアリストテレスの理念を、アリストテレスのイメージに対しては批判的に対立してきた、長い哲学的な期間の後に、反省された水準に基づいて回復したのである。

例えば、「明けの明星」と「宵の明星」の区別と同一性の知識や、日常言語で「水」というものを  $H_2O$  と記述する知識の例を挙げて (Detel, S.138)、経験によって知られる知識の後天性 (アポステリオリテート) と、経験によらずに知られる知識の先天性 (アプリオリテート) を形而上学的地平に置かず、経験的地平 (あるいは、様相) に置くことによって、ア・ポステリオリに必然的な真理が存在する、という立場を確保しようとしているようである。この限りでは、変更や修正の余地のない、何であるか (本質) があるとする立場が、アリストテレスの立場であるとすれば、少なくとも、そのようなアリストテレスの立場とは、明らかに、両立しない態度である (さしずめ、オッカムであれば、*quamvis secundum Aristotelem* あるいは *quamvis secundum opinionem Aristotelis* と言うところであろう) が、他方、経験を通じて、可

謬的な仕方ではあるが、ア・ポステリオリに真理は探究され得る、という限りでは、この態度は、アリストテレスの立場に従うもの、あるいは、アリストテレスの直観したもの (探究の態度) の延長線上にある態度であるということになるであろう。「明けの明星」と「宵の明星」とを区別する立場、あるいは見方と、これらを同一の対象とみなす立場、あるいは見方、また、「水」といわれるものを「水」という表現でのみ記述する立場、見方と、その「水」を  $H_2O$  と記述し、「水」との同一性の知識をもつ立場、見方が前提としている経験の地平は、それぞれ、どのようにして可能であるのか、また、前者から後者への移行は、どのようにして可能であるのか、という問題は、それぞれが前提としている立場、見方そのものについての問題であるが、すでに、対象領域が確定、確立された学知 (エピステーメー) ではなくて、対象領域を特定しない問答法 (ディアレクティケー) が、ひょっとすると、複数の異なる立場、見方を想定して、それらの間の調停、あるいは、一方から一方への論駁を行なう任務が課せられるという予想が、希望的観測であるにしても、可能かもしれない。そして、勿論、このことは、Detel の記述の範囲外のことである。

## 2. Whitehead の decision 或いは cutting-off

さて、ある対象、例えば、星を「明けの明星」と見るせよ、また、「宵の明星」と見るにせよ、そして、それらを区別するにせよ、それらを同一の対象とみなすにせよ、それらの立場、見方は、どのようにして可能なのか、という問いには、容易には答えられない。この問いに答える努力は全く無駄であるとは思われないが、これには否定的な立場から、問いの方向を変えた例として、Whitehead の指摘を挙げる事ができると思われるので、これを後に示したいと思う。<sup>1</sup>しかし、まず、それに先立って、問答法 (ディアレクティケー) と学知 (エピステーメー) の対象領域をどのように設定するか、という問題に対して、論述上の作業仮設 (仮説で

<sup>1</sup>以下の論述は、2007年度 (平成19年度) 後期・広島大学文学部における「科学哲学・科学思想史」の講義原稿の前半部に基づく。

はなく、本来の意味での仮説 hypothesis) として、哲学 (philosophy, およびその派生語) や神学 (theology) との関係において、科学 (science, およびその派生語) が語られるラッセルのテキストを取り上げて、考察の手がかりとしたい。

The conceptions of life and the world which we call 'philosophical' are a product of two factors: one, inherited religious and ethical conceptions; the other, the sort of investigation which may be called 'scientific', using this word in its broadest sense. [B.Russell, *History of Western Philosophy*, 1946, 1961<sup>2</sup>, p.13]

我々が「哲学的」と呼ぶ、生や世界についての概念は、ふたつの要因の所産である。すなわち、そのひとつは、受け継がれてきた宗教的、倫理的な概念であり、もう一方は、この語をかなり広い意味で用いるときに、「科学的」と呼ばれ得る種類の探究である。<sup>2</sup>

ラッセルのテキストを取り上げるにあたって、ことわっておかなければならないのは、我々は、「科学」の語義や用例、定義を求めているのに対して、次の引用からも一層明らかであるように、ラッセルは、「哲学」を定義あるいは規定するために、読者に既知のものとしての宗教的、倫理的な概念と、広い意味で「科学的」探究との二つを用いようとしている。ラッセルは、さらに、この後で、前者(すなわち、宗教的、倫理的な概念)を、神学、後者(すなわち、「科学的」探究)を、科学と言い換えることによって、いわば、消去法によって、哲学の規定を与えている。

Philosophy, as I shall understand the word, is something intermediate between theology and science. Like theology, it consists of speculations on matters as to which definite knowledge has, so far, been unascertainable; but like science, it appeals to human reason rather than to authority, whether that of tradition or that of revelation. All definite knowledge – so I should contend – belongs to science; all dogma as to what surpasses definite knowledge belongs to theology. But between theology and science there is a No Man's Land, exposed to attack from both sides; this No Man's Land is philosophy. [B.Russell, *History of Western Philosophy*, 1946, 1961<sup>2</sup>, p.13]

哲学とは、私がこの語を理解するところでは、神学と科学の中間の何かである。神学と同じよ

<sup>2</sup>ラッセル／市井三郎訳、『西洋哲学史』1、みすず書房、p.1の市井訳を参照したが、訳文は筆者による。

うに、哲学は、これまでのところ、明確な知識が付きとめられなかったような事柄についての思弁から成り立つが、しかし、科学と同じように、伝統という権威であれ、啓示という権威であれ、権威よりも人間の理性に訴えるのである。すべての明確な知識は――私はそう主張せねばならないのだが――科学に属する。他方、明確な知識を超えるものについてのすべての独断は神学に属する。しかし、神学と科学の間には、これら両方からの攻撃にさらされた無人境がある。この無人境が哲学である。<sup>3</sup>

先の引用において、ことわられていたように、この箇所でも、「かなり広い意味で」用いられた「科学」は、神学および哲学と区別された諸学問(領域科学)と解することができる(できるということは、しなければならない、ということではない)が、これは、ラッセルが前提している学問分類がどのようなものであるか次第である。市井訳でも「科学」とされており、ギリシア哲学に言及した次の箇所では、芸術、文学、数学、哲学と並べて「科学」が用いられていることから、読者は、自然科学(おそらく、天文学など)を念頭において読むことに抵抗を感じないであろう。

What they achieved in art and literature is familiar to everybody, but what they did in the purely intellectual realm is even more exceptional. They invented mathematics and science and philosophy. [B.Russell, *History of Western Philosophy*, 1946, 1961<sup>2</sup>, p.25]

ギリシャ人たちが、芸術や文学において成就したものは、万人によく知られているけれども、彼らが純粹に知的な領域で成しとげたことは、それ以上に例外的でさえある。彼らは、数学や科学、哲学を創案したのだ。<sup>4</sup>

これらの引用においては、訳語としての「科学」を、主に、自然科学の意味で理解することも可能であるが、自然科学以外の領域科学を排除するものではないことを銘記するべきである。この意味での「科学」は、ラッセルの文脈では、他の知的営みと区別される Merkmal (徴標) と

<sup>3</sup>ラッセル／市井三郎訳、『西洋哲学史』1、みすず書房、p.1の市井訳を参照したが、訳文は筆者による。

<sup>4</sup>ラッセル／市井三郎訳、『西洋哲学史』1、みすず書房、p.13の市井訳。

して、伝統や啓示という権威ではなくて、人間の理性に訴える、ということが挙げられている。この場合、直ちに、神学は理性に訴えることがないのか、哲学は理性に訴えないのか、との疑念や反問が生じるであろうが、それは、理性の定義として、どのようなものを採用するかによって依存するので、この箇所だけでは確定できない問題として指摘するにとどめる。ラッセルは、むしろ、話を簡単にするために（議論を明確にするために）、意図的に、人間の理性に訴える、ということをして「科学」に限定して用いたとも考えられる。この用法は、しかし、まったく恣意的なものではなく、少なくとも17世紀以降のフランス語（シヤンス）－英語（サイエンス）圏の science の用語法に従っている。以下にみるように、パスカルにおいては、外界の事物を対象とする科学的知識と人間に関わる道徳、慣習を対象とする学問的知識の両方について用いられる science と、人間に関わることを対象とするには適切ではない、純正科学（抽象的科学）としての science（シヤンス）の用法とがあることがわかる。

La science des choses extérieures ne me consolera pas de l'ignorance de la morale au temps d'affliction, mais la science des mœurs me consolera toujours de l'ignorance des sciences extérieures. [B.Pascal, *Pensées*, 23-67, Vanité des science]

外的事物についての科学（学問・知識）は、不幸なときに、道徳を知らないことで、私を慰めることはないだろうが、慣習についての科学（学問・知識）は、外的事物についての科学（学問・知識）を知らないことで、つねに私を慰めるだろう。

J'avais passé longtemps dans l'étude des sciences abstraites et le peu de communication qu'on en peut avoir m'en avait dégoûté. Quand j'ai commencé l'étude de l'homme, j'ai vu que ces sciences abstraites ne sont pas propres à l'homme, et que je m'égarais plus de ma condition en y pénétrant que les autres en les<sup>5</sup> ignorant. [B.Pascal, *Pensées*, 687-144.]

私は長い間、純正科学（抽象的科学）の研究の中で過ごしてきた。そして、そこで人がもち得る連絡・交渉のうち、私をうんざりさせたも

のはわずかしかなかった。私が人間の研究を始めたとき、純正科学（抽象的科学）は人間（の研究）には適していないこと、そして、他の人たちが純正科学（抽象的科学）を知らないで道に迷うときよりも、私は、人間の研究に踏み込むことによって、私のおかれた状況に一層迷うということがわかった。

エピステーメー（ギリシア語）の訳語としてのスキエンティア（ラテン語）に由来する近代語としての science に対して、ドイツ語の Wissenschaft はどうであるかということについては、ここでは立ち入らない。<sup>6</sup>

その代わりに、20世紀半ば（1959年）の時点での、次の Apostel の発言に注目したい。

Sedert ruim een eeuw wordt een ganse groep wetenschappen aangeduid door de namen: "kultuurwetenschappen, wetenschappen van de mens, geesteswetenschappen, sciences morales", enz.... Deze namen dekken niet steeds dezelfde inhoud, en ieder onder hen is de weergave van een bijzondere methodologische opvatting die niet onbestreden bleef. [L.Apostel, *Logika en Geesteswetenschappen*, Brugge, 1959, p.11.]

一群の学問（科学, wetenschappen）が、「文化科学 *kultuurwetenschappen*, 人間科学 *wetenschappen van de mens*, 精神科学 *geesteswetenschappen*, 精神科学 *sciences morales*」等という名称によって説明されるようになって1世紀以上になる。これらの名称は、必ずしも同じ内容をカヴァーしているわけではなく、これらのそれぞれは、争われていないある特殊な方法論的な見解の再現である。

We zouden niet wensen dat de keuze van onze titel zou doen vermoeden dat wij zekere opvattingen die een wezenlijk en kwalitatief onderscheid zien tussen de methoden der zgn. "natuurwetenschappen" en de methoden der zgn. "geesteswetenschappen", bijtreden. [L.Apostel, *Logika en Geesteswetenschappen*, Brugge, 1959, p.11.]

このタイトル（精神科学）を選ぶことで、いわゆる「自然科学 *natuurwetenschappen*」の方法と、いわゆる「精神科学 *geesteswetenschappen*」の方法との間に或る本質的で性質的な区別があるという一定の見解に我々が従っているのではないかと思われることを、我々は欲しないだろう。

<sup>5</sup>Brunschwicg 版に従う。Lafuma 版では、l'ignorant となっている。

<sup>6</sup>ただし、先の Detel からの引用文中で、エピステーメー（ギリシア語）の訳語としての Wissenschaft を、筆者は「学知」と訳していたことに注意されたい。

Apostel は、ウェーテンスハッペンを学問、学知という意味では、エピステーメー(ギリシア語)の意味をカバーするものとして用い、特に、精神科学 *geesteswetenschappen* と、自然科学 *natuurwetenschappen* を、本質的に異なるものとする見解に対して一定の距離を置いているように思われる。その上で、ヘーステス・ウェーテンスハッペン(精神科学)の論理(学)を模索しようとするのが、Apostel の意図であるが、ここで、我々が確認したいのは、*wetenschappen* 自体は、*natuur-*とか *geestes-*とかの対象領域を限定しなければ、エピステーメーが本来もっていた学知という(対象領域の広い)意味をもっているということである。このことを踏まえると、英語圏の *science* の訳語としての「科学」を、主に、自然科学の意味で理解することは、すでに述べたように可能であるが、自然科学以外の領域科学を排除するものではないことを銘記するべきであるというだけでは不十分であり、むしろ、自然科学以外の領域科学を含むものであったし、現にそうあらねばならないであろうということが、Apostel の例から垣間見られるのである(そして、おそらく、取り上げなかったドイツ語の場合も)。

さて、先のラッセルからの引用において言及されていた、理性に関して、理性の内実を(まさに、明確な知識として規定して、理性に訴えることなく)、いわば、漠然とそういうもの(すなわち、理性)があると想定することを前提としてではあるが、科学との関係で言及した記述が、A.E. テイラーが、プラトンの『ティマイオス』に関して述べた箇所にある。

In the real world there is always, over and above "law," a factor of the "simply given" or "brute fact," not accounted for and to be accepted simply as given. It is the business of science never to acquiesce in the merely given, to seek to "explain" it as the consequence, in virtue of rational law, of some simpler initial "given." But, however far science may carry this procedure, it is always forced to retain some element of brute fact, the merely given, in its account of things. It is the presence in nature of this element of the given, this surd or irrational as it has sometimes been called, which Timaeus appears to be personifying in his language about Necessity. [A.E. Taylor, *Plato, The*

*Man and His Work*, 1927, p.455.]

実在界には、「法則」を超えかつその上方に説明されずに単純に与えられたものとして受けとられるところの、「単なる所与」ないし「理性のない事実」*brute fact* という要因が、常に存在している。科学の務めは、単なる所与に黙従するなどということではなく、それを、合理的法則によって、ある一層単純な初めの「所与」の帰結として「説明し」ようと努めることである。しかしいかに科学がこの手続きをふみ続けようとしても、事物の説明の中に、理性なき事実、単なる所与の或る要素を常に残さざるをえない。所与のこの要素一時にはこれは不尽根数とか無理数とか呼ばれてきたのだがーが自然の中に現在しているということは、ティマイオスが必然性について語ることに擬人化されていると思われることなのである。<sup>7</sup>

自然であれ、『ティマイオス』の場合であれば宇宙であれ、何らかの対象を科学的に、すなわち、学問として、記述する、或いは説明することを、それを理論化と呼ぶならば、「理論」自身は、理論化を可能にする材料が与えられていることを必要とする。それを材料として使って理論化を行なうための「単なる所与」或いは「理性のない事実」が与えられていることを必要とする。この箇所に関連して、Whitehead は、『過程と実在』の中で、次のように述べている。

For rationalistic thought, the notion of 'givenness' carries with it a reference beyond the mere data in question. It refers to a 'decision' whereby what is 'given' is separated off from what for that occasion is 'not given.' This element of 'givenness' in things implies some activity procuring limitation. The word 'decision' does not here imply conscious judgement, though in some 'decisions' consciousness will be a factor. The word is used in its root sense of a 'cutting off.' The ontological principle declares that every decision is referable to one or more actual entities, because in separation from actual entities there is nothing, merely nonentity - 'The rest is silence.' [A.N. Whitehead, *Process and Reality, Corrected Edition*, 1978, pp.42-43.]

理性主義的思想にとっては、「所与性」*givenness* の概念は、それとともに当の単なる所与を越え

<sup>7</sup> ホワイトヘッド／平林康之訳、『過程と実在』1, みすず書房, p.62 に引用された A.E. テイラーの著作の訳文(平林訳)。

る関係をもっている。それは、何が「与えら」れるかがその生起にとって何が「与えられていな」いかからそれによって切り離されるところの「決断」decision に関わっているのである。事物における「所与性」のこの要素は、限界をもたらす或る活動性を含んでいる。「決断」という語は、ここでは意識的な判断を含意していない、もっとも若干の「決断」にあつては意識が要因となるであろうが、この語は、「切り離す」cut off という根源の意味で用いられる。存在論的原理は、すべての決断は一つの或いはそれ以上の現実的存在に関係しうるということを言明する。なぜなら、現実存在から離れるならば、何もものない、単に非存在 non-entity があるだけだ——「あとはただ寂滅。」"The rest is silence." [シェイクスピア、市河・松浦訳『ハムレット』第五幕、第二場]<sup>8</sup>

Whitehead が、いわば、比喩的に「決断」decision と言っている切り離し cutting off には、一見すると、理性が関わっていないように思われる。しかし、これも理性の定義次第で、関わっていると言うことも可能である。

The ontological principle asserts the relativity of decision; whereby every decision expresses the relation of the actual thing, for which a decision is made, to an actual thing by which that decision is made. But 'decision' cannot be construed as a casual adjunct of an actual entity. It constitutes the very meaning of actuality. An actual entity arises from decisions for it, and by its very existence provides decisions for other actual entities which supersede it. Thus the ontological principle is the first stage in constituting a theory embracing the notions of 'actual entity,' 'givenness,' and 'process.' Just as 'potentiality for process' is the meaning of the more general term 'entity,' or 'thing'; so 'decision' is the additional meaning imported by the word 'actual' into the phrase 'actual entity.' 'Actuality' is the decision amid 'potentiality.' It represents stubborn fact which cannot be evaded. The real internal constitution of an actual entity progressively constitutes a decision conditioning the creativity which transcends that actuality. [A.N.Whitehead, *Process and Reality, Corrected Edition*, 1978, p.43.]

存在論的原理は、決断の相対性を主張する、すなわちそれによってすべての決断は、そのた

めに或る決断がなされる現実的存在と、それによってその決断がなされる現実的存在との関係を表現している、ということである。しかし「決断」は、現実的存在の因果的付加物と解釈されることはできない。それはまさに現実性の意味そのものに等しいのである。現実的存在は、そのための決断から生ずるのであつて、そしてまさにその存在によって、それに取って代わる他の現実的存在のための決断をもたらす。こうしてその存在論的原理は、「現実存在」、「所与性」、「過程」の概念を含む理論を構成する最初の段階なのである。「過程のための可能態」が一層普遍的な術語である「存在」entity 或いは「事物」thing の意味であると同様に、「決断」は「現実的」という語によって「現実的存在」という句の中にこめられた付加的意味なのである。「現実態」actuality は、「可能態」potentiality の真只中の決断である。それは避け得ない頑固な事実を代表している。現実的存在の内在的な内的構造は、その現実性を超越する創造性を条件づける決断を、前進的に構成する。<sup>9</sup>

現実的存在と個体、そして問題の「決断」に関しては、グリフィンと共に、『過程と実在』の批判的校訂を行なった、シャーバーンが、次のように表現していることが示唆的であると思われる。

This concrete finality of the individual is nothing else than a decision referent beyond itself. [D.W.Sherburne, *A Key to Whitehead's Process and Reality*, The University of Chicago Press, 1981, p.17.]

個体のこの具体的合目的性は、それ自身を越えて指示される決断以外の何ものでもない。

また、シャーバーンは、現実的存在の生成の過程について、次のようにも言う。

An actual entity's process of becoming is a process of acquiring definiteness by a series of decisions to select or reject various forms of definiteness(eternal objects). [D.W.Sherburne, *A Key to Whitehead's Process and Reality*, The University of Chicago Press, 1981, pp.220-221.]

現実的存在の生成の過程は、様々な形態(種類)の規定性を取捨選択する一連の決断によって規定性(明確な限界)を獲得する過程である。

<sup>8</sup> ホワイトヘッド／平林康之訳、『過程と実在』1，みすず書房，pp.62-63 の平林訳。

<sup>9</sup> ホワイトヘッド／平林康之訳、『過程と実在』1，みすず書房，p.63 の平林訳。

話が先に進み過ぎたかもしれない。「現実的諸存在」Actual entitiesは、Whiteheadの「有機体の哲学」において重要なものであるから、念のために、例えば、以下の箇所を参照しておこう。

Actual entities involve each other by reason of their prehensions of each other. There are thus real individual facts of the togetherness of actual entities, which are real, individual, and particular, in the same sense in which actual entities and the prehensions are real, individual, and particular. Any such particular fact of togetherness among actual entities is called a 'nexus' (plural form is written 'nexūs'). The ultimate facts of immediate actual experience are actual entities, prehensions, and nexus. All else is for our experience, derivative abstraction. The explanatory purpose of philosophy is often misunderstood. Its business is to explain the emergence of the more abstract things from the more concrete things. It is a complete mistake to ask how concrete particular fact can be built up out of universals. The answer is, 'In no way.' The true philosophic question is, How can concrete fact exhibit entities abstract from itself and yet participated in by its own nature?[A.N.Whitehead, *Process and Reality, Corrected Edition*, 1978, p.20.]

現実的諸存在は、それ相互の抱握によって相互に含み合っている。現実的諸存在とその抱握とが実在的、個別的かつ特殊であるというのと同じ意味において、実在的、個別的かつ特殊である現実的諸存在の共在性 togetherness という実在的で個別的な事実が存在している。現実的諸存在の間の共在性のどのような特殊な事実をも、「結合体」nexus(複数形は nexūs と書かれる)と称される。直接的な現実的経験の究極的な諸事実は、現実的諸存在であり、諸抱握であり、諸結合体である。すべてその他のものは、われわれの経験にとっては、派生的な抽象物なのである。哲学の説明上の目的は、しばしば誤解されている。その仕事は、一層具体的な事物からの一層抽象的な事物の出現を明らかにすることなのである。具体的な特殊な事実が普遍的なものからいかにして作られ得るか尋ねることは、完全な誤謬である。答えは、「決してそんなことはない」である。真の哲学的な問い、はこうである、「具体的な事実は、それ自身から抽象されるがなおそれ自身の本性によって関与している諸存在を、いかに開示し得るか？」<sup>10</sup>

<sup>10</sup>

<sup>10</sup> ホワイトヘッド／平林康之訳、『過程と実在』1、み

いささか話が遠回りし過ぎたかもしれないが、Whiteheadにおいては、原則として、意識的な判断を含意していない「決断」decision,あるいは「切り離す」cut offということによって、事物における「所与性」が説明されるとき、その「決断」decisionや「切り離す」cut offということの主体を意識的なものとして想定してはならない、あるいは、想定する必要がないのであるが、その主体として想定してはならないもの、意識的なものとして想定してはならないものが、差し当たり、「現実的諸存在」actual entitiesと呼ばれるものである。

「現実的諸存在」は、「包握」prehensionsによって、相互に含みあう「結合体」nexūsと称される現実的諸存在の共在 togetherness が説明される。ここで、注目すべきは、あらかじめ、「決断」decision,あるいは「切り離す」cut offということを行なう主体については、これを問うことは封じられているから、「包握」「決断」decision,あるいは「切り離す」cut offということは、どのように、そしてまた、何故そのような「決断」decision,あるいは「切り離す」cut offということがなされるのか、という疑問に対して、どう答えることができるのか、ということ、あるいは、「現実的諸存在」は、どのように、現に存在する「包握」を行なうのか、ということである。しかし、Whiteheadは、「抱握」prehension等の用語を説明するにあたり、ロックを引用、検討しているのであるが、その際、ロックの「観念」ideasを採用しない。<sup>11</sup>

すず書房, pp.27-28の平林訳。

<sup>11</sup> ホワイトヘッドは、自らが用いる用語を列挙して次のように述べている。

I also discard Locke's term 'idea.' Instead of that term, the other things, in their limited roles as elements for the actual entity in question, are called 'objects' for that thing. There are four main types of objects, namely, 'eternal objects,' 'propositions,' 'objectified' actual entities and nexūs. These 'eternal objects' are Locke's ideas as explained in his *Essay*(II, I, 1). [A.N.Whitehead, *Process and Reality, Corrected Edition*, 1978, p.52.]

したがって私は、ロックの「観念」という用語を放棄する。その用語の代わりに、当の現実的存在にとっての要素という役割に制限されてい

The merit of Locke's *Essay Concerning Human Understanding* is its adequacy, and not its consistency. He gives the most dispassionate descriptions of those various elements in experience which common sense never lets slip. Unfortunately he is hampered by inappropriate metaphysical categories which he never criticized. He should have widened the title of his book into 'An Essay Concerning Experience.' His true topic is the analysis of the types of experience enjoyed by an actual entity. But this complete experience is nothing other than what the actual entity is in itself, for itself. [A.N.Whitehead, *Process and Reality, Corrected Edition*, 1978, p.51.]

ロックの『人間知性論』の功績は、その十全性 adequacy であって、その一貫性 consistency にあるのではない。彼は、常識が決して手放さない経験におけるさまざまな要素の最も冷静な記述を与えている。不幸にもロックは、まったく批判したことのなかった不適当な形而上学的範疇によって妨害されている。彼は、その著書の題名を『経験に関する試論』*Essay Concerning Experience* と拡大すべきであったであろう。ロックの本当の論点は、現実的存在によって享受される型の経験の分析にある。しかし、この完全な経験は、その現実的存在が即自的、対自的にあるところのもの以外の何ものでもない。<sup>12</sup>

Whitehead は、自らの有機体の哲学に、ある点で、ロックがきわめて接近していることを評価しているけれども、ロック自身は、もっと徹底的に伝統的な範疇の改訂を必要としていたことに気付いていなかったのだから、そのために、言明の意味の曖昧さや不整合な要素の割り込みをもたらしたという。

I will adopt the pre-Kantian phraseology, and say that the experience enjoyed by an actual en-

ところの、他の事物がその事物にとって「客体」object と呼ばれる。四つの型の主要な客体が存在している、すなわち、「永遠的客体」、「命題」、「客体化された」現実的存在、結合体の四つである。この「永遠的客体」は、『人間知性論』(第2巻、第1章、1)においてロックが説明しているような観念である。(ホワイトヘッド／平林康之訳、『過程と実在』1、みすず書房、p.76の平林訳。)

<sup>12</sup> ホワイトヘッド／平林康之訳、『過程と実在』1、みすず書房、pp.75の平林訳。

tity is that entity formaliter. By this I mean that the entity, when considered 'formally,' is being described in respect to those forms of its constitution whereby it is that individual entity with its own measure of absolute self-realization. Its 'ideas of things' are what other things are for it. [A.N.Whitehead, *Process and Reality, Corrected Edition*, 1978, p.51.]

私は、カント以前の用語法を採用して、現実的存在によって享受される経験は、形相上の formaliter その存在である、と言おうと思う。ここで私が言おうとしていることは次のことである、「形相的に」formally 考察されるとき、その存在は、その構造の諸形相に関して記述されるのであり、その形相によってその存在が絶対的な自己実現というそれ自身の尺度をもったその個体的な存在である、ということである。その現実的存在のもつ「事物の観念」ideas of things とは、その存在のために他の事物が存在しているということである。<sup>13</sup>

そして、「抱握」prehension を、「事物の観念」は、その存在の「感受」feelings である、という仕方で説明することになる。実際、Whitehead は、ロック的な「観念」ideas の分析に言及しつつ、現実的存在について、それらの「事物の観念」が、その存在の「感受」feelings であるとして、次のように述べている。

In the phraseology of these lectures, they are its 'feelings.' The actual entity is composite and analysable; and its 'ideas' express how, and in what sense, other things are components in its own constitution. Thus the form of its constitution is to be found by an analysis of the Lockian ideas. Locke talks of 'understanding' and 'perception.' He should have started with a more general neutral term to express the synthetic concrescence whereby the many things of the universe become the one actual entity. Accordingly I have adopted the term 'prehension,' to express the activity whereby an actual entity effects its own con-

<sup>13</sup> ホワイトヘッド／平林康之訳、『過程と実在』1、みすず書房、pp.75-76の平林訳。上記の引用で、最後の文は、「その現実的存在のもつ「事物の観念」ideas of things とは、その存在のために他の事物が存在しているということである。」(平林訳)となっているが、原文の最終行の what が that であれば、このように訳すことができるであろうが、what であれば、直訳すれば、「その現実的存在のもつ「事物の観念」ideas of things とは、その存在を表わす他の事物であるところのものである。」となるのではないと思われる。pace Professor Hirabayashi!

cretion of other things. [A.N.Whitehead, *Process and Reality, Corrected Edition*, 1978, pp.51-52.]

この講義の用語法では、それら「事物の観念」は、その存在の「感受」feelingsである。この現実的存在は、合成的であり且つ分析可能である、そしてその「観念」は、いかに、またどんな意味で、他の事物がそれ自身の構造における構成要素であるか、ということを表示する。こうしてその構造の形相は、ロック的観念の分析によって見出さるべきものである。ロックは、「知性」understanding および「知覚」perception について語る。彼は、その宇宙の多くの事物がそれによって一つの現実的存在に成るところの総合的合生を表現する一層普遍的な中立的用語で始めるべきであったのだ。したがって私は、或る現実的存在が他の事物をそれ自身の具体化concretionにもたらすところの活動性activityを表現するために、「抱握」prehension という用語を採用したのである。<sup>14</sup>

ここで、Whitehead が、「感受」feeling という表現で「観念」を説明していることは、ロックの「知覚」perception と「観念」の関係を考慮するならば、注目に値することである。しかし、感受にせよ知覚にせよ、その主体を想定することができるのであれば、それは、ライブニッツの perception に近いかもしれない。また、「その宇宙の多くの事物がそれによって一つの現実的存在に成るところの総合的合生 synthetic concrescence を表現する一層普遍的な中立的用語」と言われているが、concrecence という、細胞・組織・器官などの癒合・合生・癒着を表わす生物学用語で表現されざるを得なかったことに更に考察を加える必要があるかもしれない。そればかりではない。次の箇所を見てみよう。

The 'prehension' of one actual entity by another actual entity is the complete transaction, analysable into the objectification of the former entity as one of the data for the latter, and into the fully clothed feeling whereby the datum is absorbed into the subjective satisfaction - 'clothed' with the various elements of its 'subjective form.' [A.N.Whitehead, *Process and Reality, Corrected Edition*, 1978, p.52.]

一つの現実的存在の、他の現実的存在による

<sup>14</sup> ホワイトヘッド／平林康之訳、『過程と実在』1、みすず書房、p.76の平林訳。

「抱握」は、完全な取引 transaction である、すなわち、それは、後者にとっての所与の一つである前者の存在の客体化と、および、その所与が主体的満足へと吸収されるところの完全に被われた感受—その「主体的形式」のさまざまな諸要素で「被われた」clothed 感受—とに、分析可能な取引である。<sup>15</sup>

ここで用いられている、「取引」transaction は、「商取り引き」や法律上の「和解」を表わす用語である。通常、哲学の分野で用いられる用語のみに依らずに語られた、「現実的存在」は、一応、次のように、一般化される。

But this definition can be stated more generally so as to include the case of the prehension of an eternal object by an actual entity; namely, The 'positive prehension' of an entity by an actual entity is the complete transaction analysable into the ingression, or objectification, of that entity as a datum for feeling, and into the feeling whereby this datum is absorbed into the subjective satisfaction. [A.N.Whitehead, *Process and Reality, Corrected Edition*, 1978, p.52.]

しかしこの定義は、現実的存在による永遠的客体の抱握という事例を含むように、さらに一般的に述べることができる、すなわち現実的存在による存在の「肯定的抱握」は、感受にとっての所与としてのその存在の侵入 ingression あるいは客体化 objectification と、および、この所与がそれによって主体的満足へと吸収される感受とに、分析可能な完全な処理である。<sup>16</sup>

「この所与がそれによって主体的満足へと吸収される感受」と言われるとき、「主体的満足」subjective satisfaction の「満足」ということに関して、Whitehead は、別の箇所で、次のように言っている。

An actual entity is a process in the course of which many operations with incomplete subjective unity terminate in a completed unity of operation, termed the 'satisfaction.' The 'satisfaction' is the contentment of the creative urge by the fulfilment of its categorical demands. The analysis of these categories is one aim of metaphysics. [A.N.Whitehead, *Process and Reality, Corrected Edition*, 1978, p.219.]

<sup>15</sup> ホワイトヘッド／平林康之訳、『過程と実在』1、みすず書房、p.76の平林訳。

<sup>16</sup> ホワイトヘッド／平林康之訳、『過程と実在』1、みすず書房、p.76の平林訳。

現実的存在とは、過程なのであって、そこでは、不十分な主体的統一性をもった多くのはたらきが、はたらきの完結した統一性—これは「満足」と呼ばれる—に終結するのである。「満足」というのは、創造的衝動がその範疇的要求を実現することによって満たされることなのである。これらの範疇の分析が形而上学の一つの目的である。<sup>17</sup>

全体の見通しを得るためとはいえ、いささか先を急ぎ過ぎたかもしれない。Whitehead にあっては、完結した統一性である「満足」satisfaction に終結するとされている「過程」process そのものが、現実的存在の構造であり、ロック的な言い方をすれば、現実的存在の「実在の内的構造」であり、デカルト的な言い方をすれば、「過程」は、現実的存在がそれ自身において formaliter (形相的に) あるところのものであるということになる。しかし、この完結した統一性である「満足」は、現実的存在がそれ自身を超えて (beyond itself) あるものを具現しているとされる。この点については、稿を改めて考察を加えたい。(未完)

## 文献

- Apostel, L., 1959. *Logika en Geesteswetenschappen*, Brugge.
- Detel, W., 2005. *Aristoteles*, Leipzig.
- Locke, J., 1975. *An Essay concerning Human Understanding*, ed. Peter H.Nidditch, Oxford.
- Pascal, B., 1963. *Œuvres Complètes*, L., Lafuma, Seuil, Paris.
- Pascal, B., 1964. *Pensées*, L'edition Brunschvicg, Ch.-M. des Granges, Garnier, Paris.
- Putnam, H., 1983. *Realism and Reason, Philosophical Papers, Vol.3*, Cambridge.
- Russell, B., 1946, 1961<sup>2</sup>. *History of Western Philosophy*, London.
- ラッセル／市井三郎訳、『西洋哲学史』1, 2, 3, みすず書房, 1970.
- Sherburne, D.W., 1981. *A Key to Whitehead's Process and Reality*, The University of Chicago Press.
- Whitehead, A.N., 1978. *Process and Reality, Corrected Edition*, Edited by David Ray Griffin and Donald W.Sherburne, New York.
- ホワイトヘッド／平林康之訳、『実在と過程, コスモロジーへの試論』1, 2, みすず書房, 1983年.

(あかい きよあき, 広島大学 [哲学])

<sup>17</sup> ホワイトヘッド／平林康之訳、『過程と実在』2, みすず書房, p.322 の平林訳.